



report

SAGARAの「水辺WORK宣言」



2015年7月の総会で大熊代表から、代表を引き継ぎました相楽 治です。よろしくお願ひ致します。昨年信濃川では、大型助成の鮭の回遊できる信濃川復活事業が終了し、上下流の交流・連携にどうつながりか転換の年でした。通船川では、つくり市民会議の大熊孝会長からつくり沿川まちづくりの会の山中知彦会長(新潟県立大学教授)に発展継承の年でした。私は代表としてそれぞれの活動の進化と、会員の皆さんに水辺活動を楽しんでもらう場づくりに力を注ぎます。同時に、自ら面白半分責任半分で楽しく取り組めるものを「水辺ライフ WORK宣言」として提案したい。

2016.1.20 代表 相楽 治

○「水辺ライフ」時代への種まきを始めたい

「晴耕雨読」。晴れた日には畑を耕し、雨の降る日は本を読む、のんびりした農園の生活が実は最も健康的で知的な生活といわれる。では、「晴遊雨勤」はどうだろうか？晴れた日にはカヌーで水辺に浸り、雨の降る日は勤めという水辺生活が、実は最も健康的で知的で清貧な21世紀の「水辺ライフ」ではないだろうか。それをとやの潟辺で「潟ライフ」としてささやかに提供できたら嬉しい。それも水辺の会設立30年目の2017年までに。

「潟ライフ」って？

人と潟とのつながりのあるかつての豊かな暮らしぶり復活の「潟ライフ」。都心の湖上でもっとも人間的な時間、癒しに浸る「潟ライフ」。命を捨てる、命を断つ若者と対極に自分の力を試し自信を取り戻す若者の「潟ライフ」。そんな個々人の水辺への想いや期待、感性の求める状況次第で得るものも違って来る多様な「潟ライフ」をとやの潟で会員仲間と育ててみたい。

○文化としての「水辺ライフ」

「女子サッカーを日本のスポーツ文化に」(宮間あや)、「ラグビーの人気を文化に」(五郎丸歩)。日本代表の言葉の意味は重い。「子供のころ遊びの中で板合せ舟の櫓漕ぎを覚えた」(松野直一元世話人談)。子供たちに無意識で

根付いた習慣が文化だ。だとするとそれを支えた水ガキ大将も水遊び仲間もいない今、誰もが舟を漕ぎ水辺で遊べる「水辺ライフ文化」は見えてこない。イベントで終わらせず日常生活の中に組み込む「文化としての水辺ライフ」を意識した戦略的な条件づくりが必要だ。安心できる安全な水辺環境の創出と指導・レスキュー体制、個人-組織-地域をつなぐ支援の仕組や資金、情報、水辺共有のコモン空間などそのプラットフォームが持続の必須条件であろう。

○文化としての「水辺ライフ」

1987年に面白半分、遊び半分で始めた水辺を考える会が2002年にNPO法人新潟水辺の会になり、「楽しい水辺」づくりを会員仲間と進めてきた。並行して、私は「参加のまちづくり」の仕事を積み重ねてきた。

’15年、最後の務めになるだろうと思いながら、今までの少ない知見と技術、水辺仲間、人的ネットワークを水辺のまちづくり仕事としてとやの潟に投入しつつある。’16年、身内から「5%でも実現したらいいね」と言われ、欲張って十個もの「とやの潟夢プロジェクト」(別紙)を提案中。湖上の近未来に実現させたい浮棚島で、小ゴールでの歓喜の美酒を会員仲間と密やかに酌み交わしたいものである。

2015年晩秋、千曲川のヤナに鮭落ち(発見)が相次ぐ

○千曲川・石井ヤナの鮭落ち

2015年晩秋の上田市千曲川での鮭の連続発見は、サクラマスのヤナ落ちから始まりました。(ヤナ場に魚がかかることを上田では「ヤナ落ち」と言います)

10月28日朝7時過ぎ、上田川と道の駅世話人の石井孝二さんから私の携帯に連絡が入り、「石井ヤナに3匹目の鮭が落ちた」と興奮していました。

最初の千曲川での鮭発見は2010年10月、石井ヤナより1.5km上流の中山ヤナで実に65年振りでした。二匹目は2012年11月同じく中山ヤナでした。信州で話題となった貴重な鮭2尾は、地元の上小漁業協同組合の資料展示室に剥製として展示してあります。



上田市の石井ヤナの位置とヤナの状況

あれから3年、「また来たか」と私の声も上ずっていません。しかし、長野県の水産試験場の方に来ていただき調べてもらった結果はサクラマスのオスでした。

サクラマスは鮭の仲間で、太平洋のロシア東部や朝鮮半島、日本では北海道から九州まで生息しています。日本海側では「本ます」とも呼ばれ、鮭と同じように川で生まれ、子どもの頃を川で過ごした後に海に下りオホーツク海まで旅をして1年後の春には60センチ程に成長し、産卵のため再び生まれた川に戻ってきます。

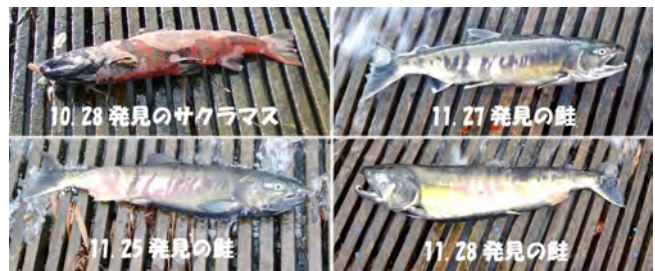
川に戻る時期は春で、その頃海でとれるサクラマスは脂がのって美味しく、富山ではます寿司の材料として有名です。またサクラマスの特徴は、同じ親から生まれても海に降りて成長して川に戻るものと、一生を川に過ごすものがあり、川に残ったものと海に降りる前までをヤマメと言います。

産卵する時期のサクラマスのオスは鮭の様に鼻曲がりときら模様の婚姻色になりますので、初めての方にとって鮭とサクラマスの見分けは極めて難しいと言えます。しかし、千曲川でのサクラマスの発見はこれまで久しくなかっただけに画期的なことであり、千曲川の河川環境が少し良くなっている証であると考えています。

○2015年の鮭の遡上調査

11月10日は信濃川・千曲川での鮭の遡上調査の最終日です。新潟県十日町市の宮中取水ダムへの鮭の遡上は戦後最多の1,514尾、しかも最終日の11月10日に78尾の新記録となり、もっと調査期間が長ければ2,000尾の大台にも達したものと思います。だが、長野県側の西大滝ダムでは12尾の確認で終り、ああ今年も長野への鮭の道は大きく拓かれることはなかったかと諦めました。

しかし、11月25日朝またもや石井さんから、「また石井ヤナに鮭らしい魚が落ちたので確認してほしい」と電話が入りました。すぐにパソコンを開き、写真を確認するとそれはまぎれもなく鮭で、後に鱗を日本海区水産研究所で確認していただくと4年魚と判明しました。



2015年11～12月、連続で石井ヤナに落ちた鮭

その後も27日、28日に石井ヤナに、12月3日、6日は中山ヤナと相次いで鮭が落ちました。



2015年12月、続けて中山ヤナに落ちた鮭

わずか11日間で5尾の鮭が発見されると言うことは、少なくともその数倍の鮭が千曲川を遡上していったことを意味していると思います。3年前の2012年3月18日、前日シンポジウムのパネラーを勤めていただきました柳田耕太氏(真岡市大前恵比寿神社宮司でNPO法人鮭守の会専務理事)より鮭の母川回帰祈願祭を執りおこなっていただき、鮭の稚魚5万尾を上田市の浦野川に放流したものが帰ってきたと考えています。

レッドマウス病の発生で今年は長野県より鮭稚魚放流及び発眼卵の埋設放流を自粛要請されている当会ですが、信濃川河口の新潟から約253kmの中山ヤナ場への鮭の遡上は日本最長の遡上記録を誇ります。今後も上流・千曲川との流域協働連携を継続、発展させていきたいと思っています。

副代表 加藤 功

湯の谷川（信濃川支川黒川の支川）における「発眼卵河床埋設放流」

12月にしては珍しく晴れわたった20日の日曜日、長岡市東頸城丘陵の薬師トンネルから長岡側へ約3km下った湯の谷川（信濃川の第4次支川）にて、鮭の発眼卵2万粒の河床埋設放流を行ってきました。

当日の参集者は、相楽代表夫妻、大熊、山岸、加藤、相馬、杉山、今の会員と、今さんの20代の友人4名（八田、前田、福田、吉澤）の12名でした。

一般の人々には「発眼卵河床埋設放流」といっても何のことかよく分からないと思われるので、当会がここに至った経緯などから紹介します。

今から約15年前、当会の石月副代表が信濃川・千曲川の河川環境改善を訴えて、その指標の一つとして鮭が遡上する自然豊かな川の復活を夢見ました。

かつて千曲川には2万尾の鮭の遡上があり朝廷への献上品とされていました。それが昭和初期に国策の電源開発事業により新潟長野県境部に昭和14年、国鉄（現JR）宮中取水ダムと東京電力の西大滝ダムが相次いで建設され、それ以降、流水がない極端な減水区間が発生して鮭などの魚類の遡上が途絶えました。

平成9年、これまでの治水・利水の河川法に環境が加わり、特に減水区間が厳しい十日町市付近の地域が求めている流水がある普通の川に戻す活動や国民的な河川環境の改善運動などから、国による信濃川中流域水環境改善検討協議会が平成11年から開催され、流量などの河川環境について検討が始まりました。

協議会の進展等により、当会は平成18年度から地球環境基金、三井物産環境基金、新潟市、長岡市、十日町市、津南町などから助成金等を受けて千曲川での鮭稚魚の市民環境放流を開始継続してきました。



平成20年にJR宮中取水ダムでの不正取水が発覚し平成21年に水利権が停止され、結果、信濃川の全水量が本川を流下しました。これらにより同年10月千曲川（上田市）で65年ぶりに鮭が発見されました。

毎年各機関からの支援を受けて千曲川での稚魚放流を行っている中で、平成23年に日本海区水産研究所から技術指導を受けて、本州では当会が初めて河床に発

眼卵の埋設を上田市の浦野川で行いました。

これは鮭の回帰を人工孵化による稚魚放流だけに頼るのではなく、自然に委ねながら持続可能な鮭の生態系の復活を目指すものです。即ち、ふ化時からその川になじみ回帰性の高い稚魚が育つと共に、ふ化場での稚魚の飼育費も節減が図れます。この方法は、すでに北海道では実施されています。

メス親魚から採取した卵にオス親魚の精液をかけてかき混ぜると卵は受精し、卵内部で分割が進行、2～3週間で卵の内部に稚魚の原型が生まれ



ます。卵の中に黒い点の眼が観察でき、この段階の卵を『発眼卵』といいます。受精してから3～5週間で卵はふ化します。ふ化したばかりの仔魚は、お腹に「さいのう」と呼ばれる袋から栄養をもらい過ごします。袋が無くなると稚魚として周辺のプランクトンなどを餌にして2～3ヶ月すると体長4cm、体重1gほどになると海へと下ります。そして3～4年後に鮭の回帰性により生まれた場所に戻ってきます。

当会はこれまで長野（千曲川）での稚魚放流と発眼卵の埋設を実施してきましたが、昨年石川県でレッドマウス病（鮭稚魚の細菌性伝染病）が発症し、長野県からの要請があり、放流・埋設を自粛したため、新潟県内河川での河床埋設放流となりました。

湯の谷川での作業は河床の砂利層を20cmほど掘って空隙をつくり、パイプを通して1カ所に発眼卵600粒を投入しその上に砂利を軽く敷き均す作業を30数カ所（内ふ化率調査箱2カ所）でおこないました。

埋設の現地は谷合いのため日陰となり気温は6℃と低かったのですが、水温は水源に近いため9℃と沢水がとて温かく感じた上、若い女性4名の手伝いもあり埋設は順調に進み大助かりでした。

12時過ぎに終了、皆で近くの台湾レストランで昼食会を開いて終了しました。当日の詳細はホームページに載っております。（写真はいずれも12月20日の湯の谷川での作業の様子）

副代表 山岸 俊男

report 04 鮭を見る・食べる・触れる

鮭を訪ねて日本海バスツアー 2015

2015年11月07日(土)、長野県上田市より「信州上田千曲川少年団」と「上田市塩田公民館」の皆さん総勢24人が新潟へサケの遡上を見学に来られました。地元の新潟から日本ボーイスカウト黒埼第1団の16人の皆さんも加わり、賑やかな見学ツアーとなりました。

私たち新潟水辺の会では皆さんの案内や昼食の用意などでお手伝いをさせていただきました。

この「鮭を訪ねて日本海バスツアー」は、今回で4回目で信濃川上流(長野県)の皆さんに下流(新潟県)でサケが遡上・産卵する様子を見学していただくものです。

これによって信濃川・千曲川によって長野県と新潟県が結ばれていることを実感していただき、上下流域交流とサケが遡上する信濃川・千曲川の復活に関心を持っていただくを目的としています。



加茂川を見学する皆さん

当日は、燕三条ICで当会の大熊孝顧問が上田市からのバスに乗り込み、車中で信濃川・千曲川や鮭について説明をし、加茂市の市街地の加茂川に到着しました。

加茂川には私達だけではなく、近くの方も鮭の姿を眺めに来ています。こんな街の中で鮭が川を遡る姿が見られるなんてとても貴重な場所だと思います。

その後五泉市南田中の能代川沿いのサケのふるさとパークを経て、五泉市の新保集落センターにて鮭汁と鮭のホイル焼きを昼食にいただきました。

「能代川サケマス増殖組合」の皆様から鮭や採れたての野菜を提供いただき、当会のスタッフで調理しました。鮭も味がよく、野菜も旨味がたっぷり美味しくかったです。

その後能代川サケマス増殖組合の皆様が能代川の「たのしほ楽新保広場」に設けられた「サケの路」みちを案内していただきました。

「サケの路」は能代川本川から分岐した水路です。本川に設けられたウライ(鮭を行き止まりにする柵)で行き止まりになった鮭が水路に入り、水路に設けた籠に入った鮭を組合の皆さんが一括採捕し、採卵し孵化場で孵化させています。

籠に入った鮭を網であげていただき、手に持ってみて、そ

の重さや跳ねる時の力強さに驚いていました。



鮭を抱えて力強さに驚く子ども達

能代川サケマス増殖組合の吉井 丈夫組合長からは「鮭の放流も続けていけば、必ず長野まで遡るはずなので頑張っ
て欲しい。川はみんなのものです。河川整備や環境保全、
漁業も大事ですが、多くの人が川に触れることがなければい
い川にはならないと思っています。」とお話をいただきました。

昨年の春に鮭稚魚の市民環境放流に参加した子どもさんは「春に鮭稚魚の放流に参加したことはあるけど、実際に大きくなった鮭が泳ぐ姿を見たり触ったのは初めてで、鮭の力



能代川を見学する皆さん

はすごいと思った。」などと話していました。

鮭が川を遡る様子は生命の力強さを感じさせ、いつまでも見入ってしまいます。参加の皆さんも出発の時間が来てもなかなか川から離れることができず、真剣な眼差しで川面を見つめていました。

最後に、上田市からはるばるお越しいただきました信州上田千曲川少年団、上田市塩田公民館の皆様、地元新潟から参加いただいた日本ボーイスカウト連盟黒埼第1団の皆様、当日美味しい鮭や野菜の提供と案内をいただきました能代川サケマス増殖組合の皆様など関係の皆様方へ御礼を申し上げます。

(レポートはwebでも紹介していますのでご覧いただければ幸いです。)

世話人 杉山 泰彦

十個の「とやの潟夢プロジェクト」

新潟駅から車で10分の場所に約160haの鳥屋野潟がある。昭和30年代までは飲料水利用があったという潟がその後排水調整池になり、一時は政治金脈の不動産になった。かつて潟辺には小潟や河川、水路網、湿田など水辺と一体の生活や産業があり、子供たちが育つ潟環境だった。その後、人の近づくなくなった潟にはヘドロが堆積し環境改善が未達成のまま水草や白鳥の飛来する野生自然になっている。今、新たな堤防整備計画で「治水」や「環境」への配慮はあるが漁業以外に資源活用はなく「利水」は未知数のままである。そこで“潟への感謝と満足”の魅力を生み出す10個の「とやの潟夢プロジェクト」を提案したい。この実現のプロセスでは問題の解決だけでなく「潟ブランド」の創出を図るのがねらいだ。当然ながら産官学民の様々な担い手が長期間、連携・協働で取り組む一大事業である。当会は未来の水辺世代を育てる「カヌースクール事業」を担えたらと思う。

代表 相楽 治

◎ PJ1 潟の船事業

潟環境遊覧クルーズ、板合セクルーズなどで潟中で体験ツアーなどを展開する基盤事業 例：二人乗りの貸しカヌー・貸し自転車事業。防災舟運の南北棧橋設置事業。



業研修での有料の潟クリーン体験プログラム事業

◎ PJ 7 潟辺の老少福交流カヌースクール事業

湖面に100艇の舟が浮かぶかつての潟の景色を再現する少年カヌー・ヨット、障害者カヌー、ソーラカヌーなどのスクール事業 例：中古カヌーを全国募集し、修繕作業貢献した会員少年が進水体験の優先順を得るプログラムなど



◎ PJ 2 漁漁連携産業学習、水耕栽培等の事業

捕る採取する漁業から見せる栽培する潟産業連携の商品・サービスを開発。志産志消会員型の事業 例：浄化野菜&浄化二枚貝浮き棚島設置事業。日和時間店型の番屋カフェ・シジミレストラン事業。6次産業型漁港設置事業



◎ PJ 8 農商工福医連携シェア型潟まちづくり事業

街なかシェアオフィスの事例「うなぎのねどこ」のようにカヌーや自転車から空間も共有できるオフィス・工房等リユースでのまち再生事業 例：潟辺のシェア住区。インキュベーターサテライト誘致。潟八景景観地区指定。潟環境保全ゾーン指定。



◎ PJ3 産業連携ハイ・ローテク水質改善事業

水質改善のロボットや人力自転車船等の潟浄化のノウハウ開発 例：潟ロボットコンペ&ギネス登録大会の複合開発事業。湖底浚渫ヘドロ活用事業。人力潟浄化楽景船開発。



◎ PJ 9 文芸技サービス開発潟ブランド創造事業

潟の素材や景観、環境、歴史などの資源活用を組み込んだオリジナル環境商品・サービスの開発事業 例：売上の一部を潟再生の事業基金に寄付するパテント商品開発。浄化・環境学習・防災救急ソーラ船の開発&舟運事業



◎ PJ 4 潟景食潟マルシェ・カフェ・レストラン事業

潟八景を生かし潟産潟消の景観食を提供するマルシェ型の八景カフェ・レストランテラス事業など 例：潟茶人の会事業



◎ PJ 5 潟食体験工房・健康交流事業

料理やお菓子、惣菜をつくる食工房塾やコミュニティ食堂と健康スポーツ交流を行うやすらぎ拠点開発 例：潟1周健康マラソン大会。潟1周複合遊歩道整備事業。



◎ PJ10 連携・提携型潟ソーシャルビジネス事業

「とやの潟ファンド」：地域問題のサポートから、寄付金、資材や労力、農漁業潟技術、潟情報、潟辺の起業インキュベーター支援のファンド設立 例：潟辺に10種1万本の桜守の森を会員制で実現。潟に感謝・潟で満足

◎ PJ6 潟再生貢献型ボランティア教育観光事業

潟の研修合宿型講座のボランティア仕事にどっぷり浸かる中で心の再生を促す事業 例：「癒しの環境鍛錬ツアー」事業。企



■水辺レポート

水辺シンポジウム 2015『子どもたちに渡したい「新潟の夢」豪華3本立てトークショー』

2015年12月12日(土) クロスパルにいがた(新潟市中央区)にて、毎年恒例の「水辺シンポジウム」を開催しました。参加者は42人でした。

今回のテーマは『子どもたちに渡したい「新潟の夢」豪華3本立てトークショー』と題して、当会の主な活動の場である信濃川、鳥屋野潟、通船川での活動を振り返りながら未来への夢を語り合おうというものです。



告知のチラシ



ボーイスカウト黒埼第1団の皆さんによる「鮭の夢物語」

環境面の改善も大きな要因ですが、それだけではなく加藤副代表をはじめとするプロジェクトのメンバーの情熱と粘り強さによるところも大きいと感じました。

パネルトークでは、日本ボーイスカウト新潟連盟黒埼第1団戸枝 邦子さん(当会世話人)は、子ども達が2015年3月に長野で発表するために作成した「千曲川と日本海を



日本ボーイスカウト新潟連盟黒埼第1団 戸枝 邦子さん

行き来する鮭たちの夢物語絵巻」を紹介しながら鮭稚魚の市民環境放流などに参加した思い出を語りました。「黒埼第1団は12月で活動を休止します。休止になっても鮭稚魚の市民環境放流や長野県の児童との交流を通じて感じたことは記憶に残るはず。子ども達には命の大切さを大事に思ってもらいたい。」とのことでした。

また、当会の大熊 孝顧問からは「これまで成功への道を進んでいると思ったが、レッドマウス病の問題で活動が停滞したことはショックに感じている。しかし物事にはそういうこともあると受け止めて活動を続けていきたい。」とコメントがありました。

鮭の信濃川の復活活動とこれから



加藤 功 副代表

相楽 治代表の開会の挨拶の後、加藤 功副代表により「水枯れの信濃川・千曲川に鮭の道を拓く」と題して2006年から継続している鮭稚魚の市民環境交流やフォーラムの開催、信濃川大河塾、長野県内の方々との交流、鮭サポーター基金、各種調査など9年間の取組を紹介いただきました。

様々な方々の視点から信濃川・千曲川や鮭に関心を持っていただくために、多様な活動が展開されています。

当会が取組を開始してから、長野県まで遡上する鮭は2009年に65年ぶりに発見されて以降徐々に数を増やしています。2015年には宮中ダム(十日町市)で1500尾以上、西大滝ダム(長野県飯山市)で12尾の遡上が確認されました。

2009年頃からの宮中取水ダムの維持流量の増加とい

次世代に贈るとやの潟の夢世界



シジミの会副会長 村尾 建治さん

とやの潟では様々な地域の団体が協働して、とやの潟を楽しく魅力ある場にしようと取り組む「シジミの会」が立ち上がったばかりです。当会も環境舟運やとやの物語での舟遊び体験などをお手伝いしながらその仲間に加えていただ

ています。

シジミの会副会長の村尾 建治さんは、ご自身が会長を務める新潟市南商工振興会の活動を紹介し、「振興

会の歴史は30年ほどになるが、鳥屋野潟クリーンウォークや桜基金など魅力あふれる鳥屋野潟を目指すことは活動の原点になっている」と話されました。



相楽 治 代表

をご覧ください)

シジミの会会長の原 敏明さんは様々な統計データやサッカーワールドカップをビッグスワンに誘致したエピソードなどを紹介いただきながら、「とやの潟が男女の出会いの場になり、若者の定着に貢献できるような魅力ある水辺空間にしたい」と話していました。



シジミの会会長
原 敏明さん



とやの話・和・輪の会
香田 和夫さん

とやの話・和・輪の会の香田 和夫さん(当会世話人)からは老朽化しているとやの潟湖畔の状況を紹介いただき「桜並木を復活させて、それを眺めながらみんなでワイワイと花見の祭りをしたい」と夢を紹介いただきました。

楽しい連携・協働の川まちづくり

当会が通船川と関わるようになったのは1995年頃からです。そのきっかけは、当会が新潟市東地区公民館の主催する環境講座を公民館と協働で運営に取り組んだことでした。当時館長だった梶 瑤子さんは現在当会の副代表です。

この活動が波及したことや1998年の8・4水害をきっかけに「つくり市民会議(通船川・栗ノ木川下流再生市民会議)」が発足し、行政だけでなく地域の方々や企業や団体と様々な人々が対等な立場でこれからの川づくりについて議論する場ができました。現在この会議は「つくり沿川まちづくりの会」へと発展し、川を利用した協働・連携のまちづくりへと取組みが変わりつつあります。

つくり沿川まちづくりの会会長の山中 知彦さん(新潟県立大学教授)からは、6年前に単身で新潟に赴



つくり沿川まちづくりの会
会長 山中 知彦さん

いただきました。

当会の梶 瑤子副代表は、「新潟市東地区公民館での環境講座はとても楽し様々な人が関わったことで学習の幅も広がった。この講座は川を良くしようという気運の醸成にもつながったと思う」と話されました。



梶 瑤子 副代表



山岸 俊男 副代表

当会の山岸 俊男副代表は「つくり市民会議」発足当時は新潟県新潟土木事務所長を務めていました。「当時新潟市東地区公民館などの活動が波及しはじめたことから、様々な立場の人が対等に幅広く議論できる仕組みを作らなければいけないと感じた。8・4水害の激特事業から始まる河川改修も着工前につくり市民会議が立ち上がらなければ上手く行かなかったのではないかと思います。」と当時を振り返るとともに、様々な立場の人達の連携は大切だと話していました。

最後に当会の大熊 孝顧問は「子どもを自然や地域にどう触れさせていくかが大事になる。小学校も学校で休みを決められるようになってきたので、地域のお祭りの日は学校を休みにするなどして、地域



大熊 孝 顧問

に子どもが参加するのでもできるようになってくるのではないかと。NPO活動もそれぞれの思いがぶつかり居心地が悪くなることもあるが、楽しく居心地のよい活動帯にしていきたい。」とシンポジウムを締めくくりました。

シンポジウム後の交流会も24人が参加し、2016年の夢など語り合い大いに賑わい楽しい一日となりました。

世話人 杉山 泰彦



『かがり火』はこんな雑誌です。 『かがり火』 発行人 菅原 敏一

小誌は1987年創刊の地域づくり情報誌です。年6回発行の隔月刊で、これまでの29年間で166号を発行してきました。

編集方針をひと言でいえば、自分の損得を考えずに地域のために奔走している「変差値」の高い人物を発見して紹介することです。なぜ「偏差値」ではなく「変差値」なのかと言えば、これからの地域おこしは頭がいいだけの地域リーダーでは限界があると考えているからです。その証拠に各種の振興法が成立以来、膨大な予算が地方に注ぎ込まれましたが、過疎化も人口減少も食い止めることができませんでした。行政効率を高める目的の町村合併がどんな結果をもたらしたかはすでに皆さまご承知の通りです。これらの失敗の最大の原因は地域の問題を金で解決できるとタカをくくってきたからです。

いま国は地方創生の旗印を掲げて全国の市町村に戦略の策定を急がせていますが、果たしてこの政策は成功するのでしょうか。私は大いに疑問を感じています。ここまで進んだ地方の衰退は、国が長年に渡って農業と地方を軽視し、大企業と都市を重視してきた政策の結果なのです。いまさら地方創生をいっても手遅れの感がなきにしもあらずですが、国は中央官庁主導の地域づくりには限界があることに気が付いていません。地方の真実を未だに見ていないと申し上げたい。私は地方を元気にするのは、自分の住む町を少しでも住みやすいものにしようと、こつこつと地道な活動を続けている無名の賢者のエネルギーがすべてだと思っています。

『かがり火』は少数のマイナーな媒体ですが、自慢が三つあります。

一つは全国に250人の支局長がいて地元の草の根情報を発信してくれることです。マスメディアは小誌からネタを見つけて記事にしたりテレビで紹介していますので、つまりハシゴの役割を果たしている雑誌とすることができます。関川村の佐藤副村長は創刊時からの支局長です。

二つ目は哲学者の内山節氏が名誉編集長を務めていることです。小誌は内山哲学の核となっている“関係性の思想”が編集のバックボーンになっております。

三つ目は大熊孝新潟大学名誉教授が古くからの読者だということです。大熊先生からは当初より大学の経費としてではなく個人として購読料をお支払いいただいています。本誌は何よりも読者が自慢なのです。

もしご興味をお持ちになりましたら年間購読(9,000円)をお申し込みいただければ幸いです。『かがり火』のホームページで最新号の記事を読むことができます。

お申し込みはメール kagaribi@ruby.famille.ne.jp FAX 03-5276-1050 までお願いします。

「かがり火」ホームページ <http://www.kagaribi.co.jp/>



魅力的な方々がたくさん掲載されています。

編集後記：新潟市の空家（あきや）についてちょっと調べてみました。新潟県内での1位はなんと佐渡市（2位で17.8%）をおさえて新潟市中央区（18.3%）だそうです。

そう考えるとドーナツ化現象と言われるように若い人達は郊外に新居を建て、中央区、特に新潟島などは高齢化が進み空家が増えているように感じます。

商業においても古町など中心市街地より万代地区や郊外の大型店などに活気があります。そこで街中に人を呼び戻そうと古町とんどんやジャズストリートなど様々な取組が行われています。

このような状況の中で、今ある空家・空き店舗を活用しようという動きがあります。

特に上古町と言われる地域において今、様々なお店、特に地域コミュニティ機能を備えた店が増えています。皆さんご存知の「明和義人館」や「ふるまち良寛てまり庵」などもその一つです。

また、この2月にゲストハウス & バー「人参」が古町通三番町にオープンします。私も国内旅行をした時にたまたま泊まるゲストハウスですが、格安で色々な人と交流できる楽しい施設です。様々な国の人が古町を歩いていたら楽しいですね。

そして、聞いてみた所、新潟島には格安で貸して頂ける空家もあるようなのでボランティア団体の事務所としても使えそうです。事務所を持たない団体が多い中、地理的にも有利な中心街で事務所を持つことが出来たら、活動も楽しく活発になるのではないのでしょうか。

編集人：森本 利

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会

●事務局 〒950-2264 新潟市西区みずき野4-7-15 大熊 方

Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3260

●ホームページ <http://niigata-mizubenokai.org> ●メール info@niigata-mizubenokai.org

●会員数 個人会員143人、法人会員9団体、賛助会員4人、顧問3人（2016年2月1日現在）